

「人間とは何か」その答えが見つからないから、追求しているのです。



のむらとよかず
乃村豊和さん(里町・57歳・画家)

1982年春陽展で春陽会賞を受賞。以後、毎年各地で個展を開催する傍ら、日本芸術協会審査役員などを務める。(注)春陽会正会員。現在ロサンゼルスに在住。

僕は雑草です。——芸術大学卒、美術大学卒なんて肩書きは持っていない。絵の世界には正門からではなく脇から入っていったようなものです。でも、プライドは高かった。だから基本のデッサンもクロッキーもたくさん描きました。クロッキーブックを積んで背くらいの高さになると一人前と言われますけど、僕はもう天井に着くくらいです。

泣いてくれる人もいますよ。逆にこちらが勇気付けられました。「人間とは何か」これが長年のテーマです。だからバレリーナをモチーフにして、人間の人生を投影しているんです。普段の練習風景に日常を。舞台上上がる前の緊張と不安、本番が終わった後の反省、安堵感と達成感。僕の絵を見た人が自分の姿をそこに写し見ている



幕間の白鳥

筆者のつぶやき

アメリカと日本を行き来しながら世界を舞台に活躍している乃村さん。個展の合間の忙しいときに時間を割いてくださいました。インタビュー取材にかかった時間は4時間以上。それでも尽きない数々のお話。「芸術は格式ばったものではない」と言ったその言葉と同じ、きさくな人柄に作品以上の魅力を感じました。

のでしょね。どうしても描けなくなつた時は、ただ目をつむって紙に向かう。そうすると、自然と線が描けたんです。経験がそうさせるのか、なぜかは分かりません。ある時を境に、それができるようになったんです。何者かが僕の体を使って絵を描いているんです。感覚・感性は常に磨き続けなくては いけませんよ。立ち止まると落ちていってしまふ。僕の場合はたまたま絵画というものに顕著に表れた。本当に運が良かったんです。今は多くのことに感謝をしています。だから以前のようなおごりもない。その分、濁りのない心でいられるんです。皆さんにも僕の絵に代わるような何かがあります。その何かを自分で発見するのか、誰かに引き出してもらうのか。それは人それぞれ。でも、必ずその人だけの良い所がありますよ。